

大漢和辞典（諸橋轍次）
和漢三才図会（寺島良安）
広文庫第3冊（物集高見）

76. 「対物宮城の穴」とは

問 「仙台市史」第1巻の568ページと569ページの2個所に「対物宮城の穴」とありますが、これはどのようなものですか。

答 「仙台市史」第1巻のその箇所には、次のように記されています。

『「雪^モキ度物 旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名」「遺憾ナ物 田封(田村)旧郡岩手ニ附ス 七日王城寺西原開拓地ニ占ラル」「毀ツテ惜キ物 青葉本丸ノ建物 大年寺」「捨テラヌ物 佐久間洞巖⁽¹⁾ 観跡聞老志 虎岩道説仙台人物志」という明治十五年「対物宮城の穴⁽²⁾」の対は、明治前期における仙台の人士の痛恨の念と旧藩に対する懐古の情とを象徴している。この思いは、昭和の初年まで、仙台の思想と文化とを支配する一つの大きな流となった。……「対物宮城の穴⁽³⁾」が「鎮台ノ号砲」と並べて「耳馴レタ物」として……』ところが、上記文の「対物宮城の穴⁽⁴⁾」には注記番号が付いており、その注記の部に『山本晃「番附類」（仙台郷土研究一ノ一一）』と出所が示してあるのです。

そこで「仙台郷土研究」第1巻第11号の「番附類」（山本晃）の本文に当たりますと、それには「対物宮城の最⁽³⁾〔もつとも〕」とあり、また、「わしが国さ」第39号（仙台協賛会）の「仙台郷土文献展覧会」の記事中にも「対物宮城の最⁽⁴⁾」が載っており、「仙台市史」の方の「対物宮城の穴⁽⁴⁾」は2箇所とも誤りであります。この番付は、明治15年7月に出たもので、同類の事物のうち、最⁽³⁾も〇〇なものの2物を144組對置配列したものであります。ですから、この番付を読み取る場合は、「最⁽³⁾も雪⁽³⁾キ度物旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名」、「最⁽³⁾も遺憾ナ者田封(村)旧郡岩手ニ附ス 七日王城寺西原開拓ニ占ラル」とするわけです。

注(1) p.195の注(9)参照。

注(2) とらいわどうせつ。儒医。名は玄乙、字は忍性、幼名卯之松、後に道説と改め、老いて塞馬と号した。寛文3年〔1663〕4代伊達綱村の侍医となる、時に年37、道説学を好み、書をよくして名を挙げた。「仙台人物志」「燈前新話」等の著あり、享保10年〔1725〕11月歿、享年98、仙台北八番丁江巖寺に葬る。

注(3) もと相撲の番付から出て、芝居をはじめ長者・金持・学者・医者・書家・画家・戯作〔げさく〕者・武芸者から美人番付に及び、商売にも茶屋・菓子屋・料理屋その他、商品の酒・醬

油・油・名物・玩具・化粧品・植木(おもと・朝顔・菊)など、ほかに「福づくし」「橋づくし」などの「見立番付」や「名所番付」など多様な番付がある。なかには、仙台で、明治15年に作られた「宮城人物見立」や「対物宮城の最」など、或る意味で資料的なものもある。

注(4) 対物宮城の最(明治15年7月)

△聞タイ物 佐久間少将ノ軍議 松平県令地方会議△名誉ナ物 西岡判事ノ公判 赤星国手ノ手術△未タナキ物 勅任官ノ拜命 学識活用ノ紳士△雪キ度物 旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名△望マシキ物 自由党ノ団結 地方官ノ民選△開ケル物 野蒜築港 関山隧道△急キ度物 鉄道敷設 七大工事△怖イ物 虎列刺病ノ伝染 県債負担ノ重荷△遺憾ナ物 田封(村)四郡岩手ニ附ス 七日王城寺西原開拓地ニ占ラル△賜リ物 三好監物祭祀料 林子平位階△捨ラレヌ物 佐久間洞巖観跡聞老志 虎岩道説仙台人物志△疑ハシキ物 壺ノ碑 野田ノ玉川△信シ難物 山家〔やんべ〕 清兵衛ノ靈魂 宮沢ノ難由来△飾ツタ物 伊達巖秘録 敵討白石嘶△考フ可物 榴ヶ岡ノあぜみ 宮城野ノ萩△自慢ナ物 榴ヶ岡ノ桜 公園〔西公園〕ノ梅△評判負ノ物 宮城病院 青葉祭り△見事ナ物 仙台ノ花火 松島ノ燈ロウ流シ△毀ツテ惜キ物 青葉本丸ノ建物 大年寺△厚ク成タ物 世人ノ面皮 饅頭ノ皮△盛ニ成タ物 民権議論 農家ノ奢侈△喪タル物 日本魂 結髪家△重ク成タ物 贅物ノ賦金 軍人ノ帯剣△耳馴レタ物 鎮台ノ号砲 新聞ヤノ重禁錮△左様デモナイ物 奥州ノ喰斃レ 仙台ノ陰謀謗△間違タ物 仙台味噌ヲ仙台ウソ 奥州ノ費ヒ小便ヲ連レ小便 △龜末ナモノ 旅人ノ問ニ道知ラセ 士族商人ノ客扱ヒ△真面目ナ物 瑞鳳山ノ靈屋守リ 田舎剣舞ノ太鼓背ヲイ△味ノ悪イ物 市中蕎麥ノタレ 比丘尼坂ノ甘酒△士族ノ家ニ残物 古ル上下 刀ノ小道具△掘テモ出ナイ物 栗原築館ノ金 名取埤沼ノ宝△奇タイナ物 三居沢片葉ノ芳 笠島ノ道祖神〔対物144組の内。下略〕

資料 番附類(山本 晃。「仙台郷土研究」第1巻第11号の内)

仙台郷土文献展覧会(「わしが国さ」第39号の内)

77. 「仙臺風」という古書

問 テレビで見ました、Y大学の秋山史郎教授著の「仙臺風」という本がありますか、仙台は昔から米や食物が豊富なので生活が楽であったため、他国から移り住む者が多いと書いてあるそうですので、原文を読みたいので。

答 「仙臺風」という本は、名古屋市の江戸軟文学研究者として高名な尾崎久弥氏所蔵本の中から、昭

(1)